

## 城南村田 真空成型で初の自社開発製品

## 手軽に生花運べる透明ケース

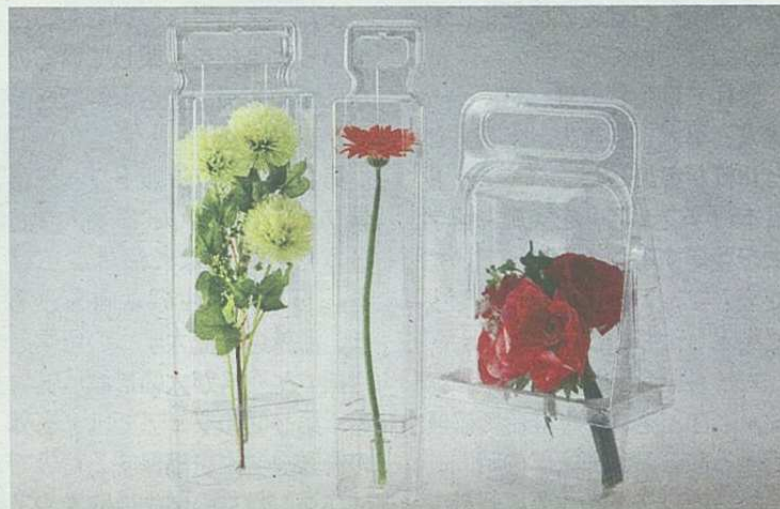
## 飛躍カンパニー

洋紙・板紙の卸売り、真空成型金型などの事業を展開してきた城南村田（東京都大田区）が、初の自社開発製品の販売に乗り出した。得意の真空成型技術を使い、手軽に生花を持ち運びできる「フラワー プリスターケース」として商品化したのだ。日本の製造業を支える町工場の集積地、東京・蒲田で、またユニークな商品が誕生した。

自社開発製品は中小・ベンチャー企業が飛躍するために欠かせない。城南村田でも、熱で軟化させたプラスチックシートを金型に押し当てて成型する真空成型技術を使ったオリジナル商

品の構想は以前からあったという。だが、食品トレーに代表されるように真空成型品は安価な一方、「チープ」に見える欠点があった。このため、真空成型品は使い捨てが当たり前。この常識を覆し、チープに見えず、繰り返し使える製品の開発を目指した。

開発の原点になったのが営業責任者の小原由加さんが目にした、ある光景だった。昨年5月の「母の日」のこと。男の子が母親に贈るための一輪のカーネーションを差したまま、自転車で勢いよく走っていたという。「せっかくのプレゼントが家に着く頃には駄目になってしまう……」。小原さんの女性らしい細やかな視点が自社製品のヒントとなった。



開発に先駆け、街頭調査をしてみると、男性の80%が「生花を贈りたい」と思っているながら、花を持ち運ぶことに気恥ずかしさを感じる人が多いことが分かった。一方、女性の94%が花のある生活を「良いと思う」と回答しながら、67%が花瓶を

持っていなかった。手軽に持ち運びができ、そのまま部屋にも飾れる透明のケース。開発のコンセプトが固まった。

デザイン面では、東京都の産学連携デザイン開発プロジェクトに参加、そこで出会った法政大学デザイン工学部の大島礼治

城南村田の「フラワー プリスターケース」。持ち手があり、手軽に生花を持ち運びできる

教授らの協力を得た。大島教授らは生花を長持ちさせるため、腐敗を進めるエチレンガスが自然に排出されるよう容器形状と空気孔を最適化。こうして生まれたのが、持ち手があり、カバンに入れて持ち運ぶこともできる今回のデザインだった。

さっそく10月に幕張メッセで開かれた「国際フラワーEXP0」に出展した。その場で成約することはなかったが、生花店や農家から声を掛けられたという。来年の母の日に向け、小原さんは手応えを感じている。

(高橋俊一)